土地亀の開発に努めた大桃団次って？

上土地亀、下土地亀の一帯は、江戸時代に土地亀新田と呼ばれていました。

江戸時代半ばの享保の頃（1716～1736）には、のちに千町歩地主となった白勢家（本家新発田市加治川地区）が50ha（町歩）余りの新田開発を請け負ったことが知られています。また、新津組（新潟市秋葉区）の大庄屋 桂家や大面組（三条市栄地区）の大庄屋 新井田家が、新発田藩の命令によって、この地で新田の開発にたずさわったことが知られています。

さて、郷土の開発に力を尽くした人物として石碑が建てられた「大桃団次」とはどんな人物なのでしょうか。

残念ながら、石碑に説明がなく、詳しい資料も残っていないため、よくわかりません。しかし『大郷村誌』に、大桃団次ではないかと推測される人物のことが書かれています。

そこには、大面組大庄屋の新井田家3代目助左衛門が、隠居後に団次と改名し、稲荷岡新田（新発田市稲荷岡）に居住して、諸新田開発掛という役を務めたことや、弟の弥市が利左衛門と改名し、土地亀新田の名主を務めたことが書かれています。「大面の団次」が時代の移り変わりとともに「大桃団次」と呼ばれるようになったのかもしれません。

また『長浦村郷土史』には、団次は、阿賀野川を松ヶ崎で掘り割ったことにより住むところや耕地を失ったので、2～3人の同志と土地亀新田に移住して開墾に従事した人物と伝えています。

郷土開発祖 大桃団次君之碑（川西1）

MEMO

千町歩地主
耕地所有規模が1000ha（町歩）以上の地主のことです。

大庄屋
いくつかの村をまとめた「組」の長で、藩と村々の間で円滑に地域の支配が行われるよう働きました。

名主
村の長で、年貢の取り立てや戸籍の事務など村政全般を取り扱いました。

『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。